

「資料 続日本工業教育史」

小林一也ほか著

本書は、著者が長年にわたり収集・執筆してきた原稿をもとに、「日本工業教育史」の続編としてまとめられたものである。

「序章 日本の源流」では、21世紀の教育を創出する場合、「寺小屋」や「私塾」「藩校」を手本とすべきとし、私塾である広瀬淡窓の「咸宜園」や水戸藩の藩校「弘道館」が紹介されている。そして、日本の近代化は、明治政府による近代学校の整備以上に、その基盤は寺小屋に代表される江戸時代の教育にあったと指摘している。

第一編 平成教育改革と工業教育の「第一章 現代日本の教育改革」では、中央教育審議会、臨時教育審議会、教育課程審議会等の審議の経過と学習指導要領の改訂内容が、よく整理されてまとめられている。

「第二章 2003年からの工業教育」では、学校週五日制のもとの工業教育のあり方として、ものづくりを通しての人間教育、技術主体から生徒主体の工業教育への質的変換などについて述べられている。

「情報教育」については、普通教科や専門教科「情報」について設置までの経緯がまとめられ、学習指導要領の改訂に伴い、「産業教育施設・設備基準」の改訂が図られたが、その概要も示されている。

第二編 特色ある工業高等学校づくりの「第一章 伝統に生きて」では、全国の伝統ある工業高等学校として、熊本工業、松山工業、愛知工業、高岡工芸、盛岡工業、苫小牧工業が紹介されている。

「第二章 特色を生かして」では、成長型から成熟型教育に転換し、人間として幅広い能力を開花させ、個性の確立のために特色化

を推進する工業高等学校として、淀川工業、一関工業、蔵前工業、宇都宮工業、宮島工業、米沢工業、佐土原、都島工業、札幌国際情報を紹介している。

第三編 二十一世紀（夢）の工業教育では、「体験を通してさまざまな発想を生み、それが目的意識、意志に転化し、理論の深化につながっていく学習こそ本道であり、この担い手の養成こそ後期中等教育における工業教育である」としている。「第一章 日本の教育・学校」では、体験を通し、選択・判断の学習を繰り返しながら、自分としての結論の発見に導くことが教育活動の中心に据えられ、児童・生徒の精神性を練る、心を耕すことに、教育は向かわねばならないとしている。

「第二章 これからの工業教育」では、「連続（伝統）と変化（改革）を組み合わせ、さらに振興する」ために、「メカトロニクス時代の人材育成」「工業教育の不動の基本」「ドイツ・アメリカの高等学校」「高度情報通信社会の展望」「夢の工業高等学校構想」などについて述べられている。

第四編 「資料 日本工業教育史 補遺」では、前編「資料 日本工業教育史」に寄せられた意見を参考として、「去華就實」と戊申詔書との関連、インドの教育、私学の工業教育についてまとめられている。

「終章 主体的な人間を追い求めて」では、日本は優れた工業生産により経済大国の頂点に達したが、金銭的な余裕が「ほんとうの人間を育てる」方向に向かわず、知的水準は向上したが、自らを制御する心を希薄にし、住みにくい日本にしてしまったと指摘し、今後の工業教育は、環境へのかかわりから哲学や倫理とも結びつけ、総合的な学問として発展する必要性があると結んでいる。

（実教出版 397頁 4,000円）（山下省蔵）